

今回は、古墳時代初めころ(4世紀)の竪穴住居に使われた建築部材や集落周辺の植生を紹介します。

常名に所在する神明遺跡や北西原遺跡の竪穴住居跡から、焼けた土や炭化した木材などが多量に見つかりました。おそらく火災にあったのでしょう。理化学的な分析によって、炭化した木材からは木の種類が、焼けた土や住居内の土からは、含まれている花粉などによって周辺に生育していた植物を調べることができそうです。

神明遺跡の炭化木材を分析した結果、竪穴住居の建築部材に使われていたのは、コナラ節(コナラ・ミズナラ・カシワなどで構成)が多いことが分かりました。ほかにわずかですがアカガシ亜属(アカガシ・アラカシ・シラカシなどで構成)も確認されました。関東地方の事例をみると、古墳時代はコナラ節とクヌギが多く使われていたようです。このころの人々にとって、コナラやクヌギは生活に欠かせない樹木だったと言えるでしょう。

火災により炭化した建築部材  
(北西原遺跡)



コナラの木  
(上高津貝塚ふるさと歴史の広場)

縄文時代をみると、主にクリが使われていました。クリはコナラより成長が倍以上速いのですが、どちらも同じ環境で生育する木なので、何らかの理由により使用する木を選んでいったと思われる。伐採や加工技術の進歩、食料や農具など建築部材以外の利用の変化などが、人々と森林とのかかわりを変えたのかもしれない。

神明遺跡からは、樹齢50年以上たっている木を板状や角材に加工した炭化木材が見つかりました。大きな木を切り倒し、加工する道具や技術を持っていたのでしょう。おそらく楔や鉄製の斧が普及したためと思われる。これにより、ある程度樹齢のたつた木でも利用することが可能になったのです。

分析結果をもとに、当時の神明遺跡周辺に広がる森林や草原の植生を推測してみると、森林には落葉広葉樹のコナラなどが多く、アカガシやシイノキ、針葉樹のスギなども生えていたと思われます。木の下にはササが生い茂り、住居のまわりにはヨモギ、ススキなどの雑草が生育していたようです。

イネも確認されており、稲作が行われていることも分かりました。神明遺跡や北西原遺跡からは、古墳時代初めころの竪穴住居跡が130軒以上見えています。大きな集落が形成され継続する背景には、稲作が大きくかかわっていたと思われる。

このように使われた樹木や植生を調べることによって、当時の自然環境はもとより、さまざまな環境のもとで、人々がどのように暮らしていたのかを推測することができます。

神明遺跡から出土した土器や勾玉を、上高津貝塚ふるさと歴史の広場で今月末まで展示しています。ぜひご覧ください。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場 (☎826・7111)